

ヒトツバタゴ自生地の概要

犬山市のヒトツバタゴ自生地は、犬山市の南東、本宮山の麓にあります。木そのものではなく、ヒトツバタゴが自生する一帯の土地が、国の天然記念物に指定されています。令和8年3月現在、ヒトツバタゴ自生地には、成木が全部で6本あるほか、幼木が複数本自生しています。

ヒトツバタゴ自生地の歴史

文政5年(1822)頃に、名古屋の本草(植物)学者の水谷豊文がヒトツバタゴの自生地を発見しました。同8年(1825)に水谷が書いた本『物品識名拾遺』に「ヒトツバタゴ」の名前が初めて記されました。その後、自生地の場所は分からなくなりましたが、大正11年(1922)に、内務省から依頼を受けた波磨賢太郎が調査を行い、ヒトツバタゴ自生地を再発見しました。翌12年(1923)には、「珍奇又は絶滅に瀕した植物の自生地」として、天然記念物に指定されました。

犬山のヒトツバタゴ自生地はここがすごい!

日本全国の分布

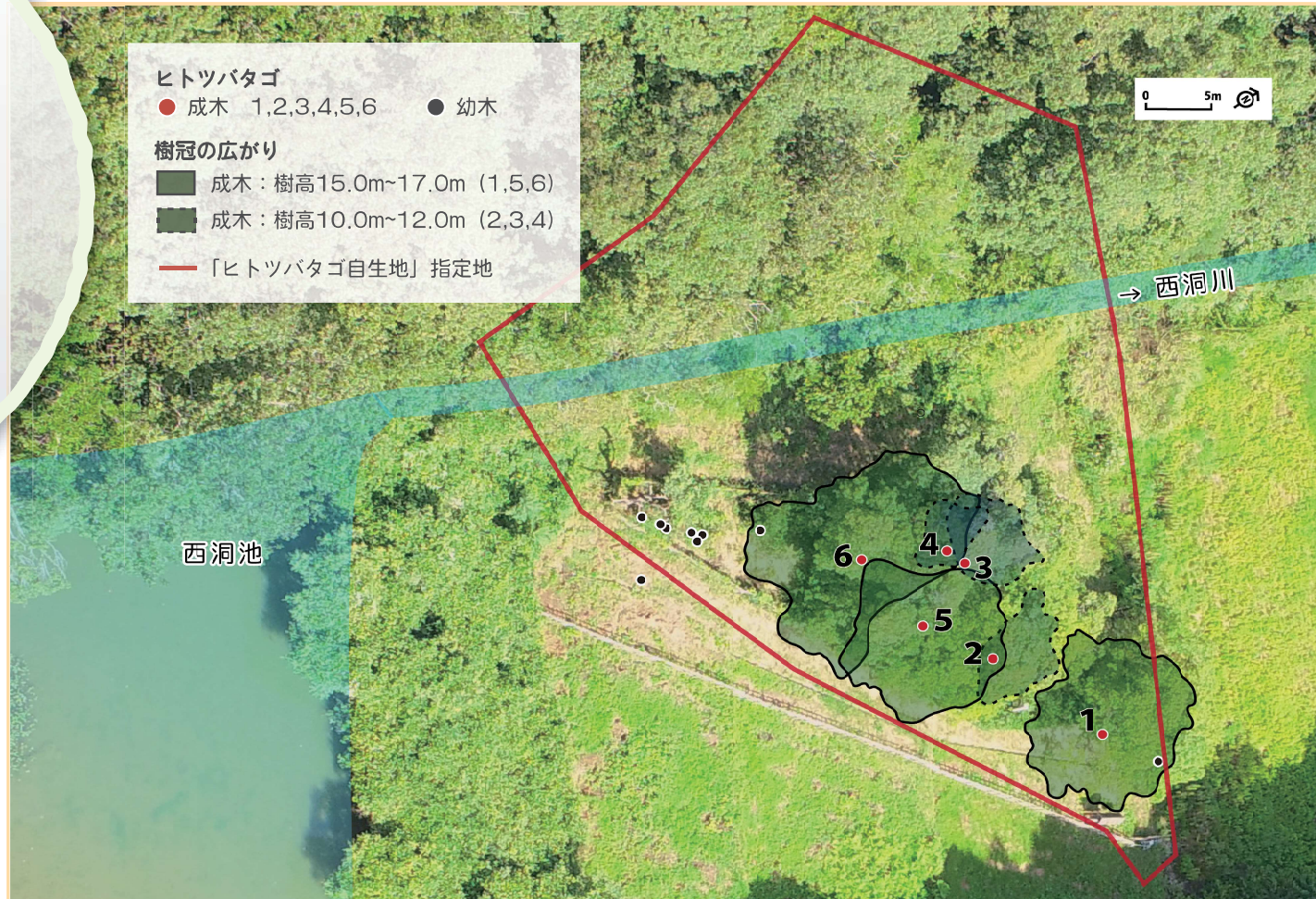
ヒトツバタゴは、日本国内では本州中部(長野県、岐阜県、愛知県)及び九州(対馬)にのみ自生しており、分布する地域に限られています。なぜこのような分布をしているかを考えることは、日本列島の成り立ちを理解するカギとなります。

自生地周辺の環境

ヒトツバタゴは、湧き水のでる湿地帯や、その周辺のやせた土地で自生する植物です。このような土地は開発に伴い失われつつありますが、自生地周辺には残されています。自生地周辺にはマメナシやハナノキといった貴重な植物が自生しており、自然観察を楽しむことができます。

いのちのリレー

犬山市の自生地では、ヒトツバタゴが自らの力でつけた種が発芽して育っています(これを「実生」といいます)。実生による自然更新が行われている場所は全国でも珍しいです。自生地の南側には、かつて成木が生えていました。成木は枯れてしまいましたが、その木がつけた種子から幼木が育っており、個体の自然更新が進んでいます。



ヒトツバタゴ（植物）の概要

落葉の高木で、日本、台湾、朝鮮半島、中国大陸の一部に分布しています。自生個体は貴重で、国の絶滅危惧種に分類されています。

木の形状はタゴ（トネリコ）の木に似ていますが、一つの柄に対して一つの葉が付くことから、「ヒトツバタゴ（一つ葉のタゴ）」と名付けられています。また、名前がわからなかったことから「なんじゃもんじゃ」とも呼ばれています。

犬山市の自生地では5月上旬頃に開花し、純白で円すい状の花をつけ、満開時には雪が積もったようにも見えます。落花後、約1cmの楕円形の果実をつけます。

花の見頃は
5月上旬頃



ヒトツバタゴの花



ヒトツバタゴの種子

交通案内 〈所在地：犬山市字西洞41番2〉

- 名鉄犬山駅東口より岐阜バスコミュニティ明治村線に乗り、バス停「神尾（かんの）」で下車し、徒歩10分

※周辺に駐車場はありません。



問い合わせ先

犬山市教育委員会歴史まちづくり課

TEL：0568-44-0354（平日9：00～16：00）



国指定天然記念物

ヒトツバタゴ自生地



愛知県犬山市